

【作品タイトル】ひろむすの夜

【作者名】山田めい

【あらすじ】

「公益社会法人ひろむす」は、グループホーム「ひろむすのいえ」を運営している法人である。ひろむすのいえは、自宅で生活することが困難を抱える者が介護者から生活の指導や介助を受けながら生活をする場である。入居を求める問合せの電話は繰り返し鳴るが、すでに入居を多数受けて入れていおり、施設の容量は溢れ、職員も疲弊していた。所長の今木（いまき）や、正規の職員である七岡（ななおか）や善子（よしこ）、パートとして働いている石田（いしだ）も連日夜勤が続き、疲れが限界に近づいているのだった。

ユキオはひろむすのいえに入居している利用者のひとりである。ゆきおはホームの自室からは外出せず、代わりにロボットを使用して外出をしている。ロボットと言っても、2つのささやかな車輪がついた、一五〇センチ丈の金属の柱、柱の先端には、縦一五〇ミリ×横七〇ミリ、厚さ一〇ミリ程度の大きさの液晶ディスプレイがついた小柄なものである。このディスプレイには音声マイクと小型のカメラが搭載されており、ユキオは遠隔操作を行いながら他人とコミュニケーションをとっているのである。

ある日、ユキオが書き溜めている文章の中から「運び祭の夜に」※という原稿を、作品として出版するという話が七岡（ななおか）から提案される。一方、石田は施設の利用者の創作物を販売することを反対している。明け方まで話し合っているうちに、職員たちはユキオが施設から脱走したことに気がつき、総出でユキオを探すことになった。しかし、職員がみな搜索しては、施設の運営に支障が出てしまう。施設で暮らす他の利用者たちの介助を続けるために、石田は休日で欠勤していた所長の今木を応援で呼ぶことにした。石田は今木の自宅アパートを訪ねるが、今木は「仕事をやめて、今後は壁の中に住む」と言って壁の中の生活を始めていたのだった。

※「運び祭の夜に」あらすじ…「汗苦勞土村（しるくろどむら）」で70年に一度開催される奇祭「運び祭」を求めて、チョルスと三郎は旅をしている。ところが、途中で二人は大げんかをしてしまい、別々の道を進むことになる。一人村にたどり着いたチョルスは「運び祭」に一人参加することになる。

【登場人物】

石田（いしだ）……………「ひろむすのいえ」の職員。
善子（よしこ）……………石田の同僚。
七岡（ななおか）……………石田の後輩。

ユキオ……………小型ロボットを遠隔操作して生活をしている「ひろむすのいえ」の利用者。
今木（いまき）……………公益社会法人「ひろむす」が経営する「ひろむすのいえ」の所長。

『運び祭の夜に』の登場人物

滝チヨルス（たきちよるす）★ユキオが演じる……………さすらいの旅人。方向音痴。
五反田三郎（ごたんださぶろう）……………さすらいの旅人。気が短い。
ジーニアス貴子（じーにあすたかこ）……………村の学者。運び祭の有識者。
野々村みか（ののむらみか）……………最近仕事を辞めて村に帰ってきた女の子。
野々村響子（ののむらきょうこ）……………みかの姉。運び祭実行委員会のリーダー。
八千草香織（やちぐさかおり）……………響子とみかの幼馴染。運び祭実行委員会
花巻花子（はなまきはなこ）……………村長。みんなからは花巻村長と呼ばれている。

「白い壁に出てきた少しの突起物」

夜明け。始発の電車が街の中を走る音が聞こえる。静かなようにも思えるが、街の中は朝の音で溢れている。携帯電話の着信音のような音も聞こえる。浅桶町(あさおけまち)に建てられた築三十三年、1DXの戸建て住宅の玄関先。しばらくの間玄関には誰もいない。すると、玄関の白い壁の中から、男の左手がゆっくりと出てくることに気がつく。

最初は中指の頭が少し見える。

白い壁に出てきた少しの突起物、あれは一体なんだろうかと思っていると、手のひら全体が現れる。そして、あれはもしかすると人の手ではないだろうかと思っていると、その手はもうすっかり腕あたりまで出ている。その手は色白く、細いようにも見えるが、しっかりと肉のついた男性の手である。

玄関の戸を激しく叩く音。

【0】家を出たユキオ

石田は、公益社会法人「ひろむす」で働く職員。ポロシャツに制服のエプロンをつけている。その姿は、玄関先から姿は見えないが、声が聞こえる。

石田 今木さん！今木さん！……今木さん！……起きてください！

石田 すんません、電話出てくれないので、家まで来ましたよ。

しばらくの間。

今木からの返事がない。

石田、もう一度玄関の戸を叩く。

石田 お休みのところすみません、出勤、今日の、入ってくれませんかね！

しばらくの間。

やはり、今木からの返事がない。

石田 ユキオが逃げ出したんですよ…… 七岡さんが今探していますけど、わかるでしょ？ただでさえ人手が足りないっていうのに、最近何か大人しいと思っていたらユキオのやつ……そんなわけで、朝勤出ただけませんか？あと3時間で朝の五時三十分です。走れば間に合いますよ。七岡さんがいないんじゃない、準備が間に合いません。所長、来てください。

今木からの返事がない。

石田、もう一度激しく玄関の扉を叩く。

石田 所長！ 外に置いてある自転車のおかげで、所長が家の中にいることははっきりしてるんですよ？ 疲れて寝てしまって、携帯の着信にも、私のノックにも気づかなかったってつもりなんでしょうけど、本当に困ります！ 朝勤、出てください！ ユキオが帰ってくるまでの間でいいので。

石田がもう一度携帯電話を鳴らす。

部屋の中からは着信音が聞こえる。

石田、部屋に鍵がかかっていないことに気がつく。

ゆっくりと扉を開けて、中に入っていく。

石田 入りますよ……

石田 ねえ？

石田、部屋の中に人影がないことをゆっくりと確認していく、

石田 あれ……？ねえ、いるんでしょう？

石田、気配を感じて、壁の方を振り返ると、そこに出ている手の存在に気がつく。

石田 (その手と目があう) あっ……………

驚いて、思わず動くことができなくなる石田。

壁から出ているその手は、手を振る。

壁から出ている手 (手を振っている)

壁から出ている手は、手を振り続ける。

石田、その場で固まっていたが、やがて何かに気がつく。

石田 ……………今木さん？

♪音楽

暗転

今木家の玄関先。

黒い壁からは色白い男の手が出ている。

石田 ……キソウホンノウという奴があつて、ちよつと賢い生き物なら、家まで帰つてくるつて言うでしょう？だけど、ユキオは違う。本能つてやつはあるんだと思うけど、絶対キソウして来ないよ。普通は、誰かに急に噛み付くなんてことはしないじゃない？例えば、いま私とあなたがこうやつて話していて、私が急にあなたの手に噛み付いたりなんかしたらどう？そんなことしたらいけないでしょ？だって、それは、なんていうか、そう、常識だから、

右手 (手話)

石田 どうしよう、ユキオが今まさに外で誰かに怪我させてたりなんかしたら……

右手 (手話)

石田 ……何か食べます？

右手 (手話)

石田 私、帽子パン持つてるんですが。

右手 (手話)

右手 (手話)

石田 おトイレとか？

右手 (手話)

石田 うそ、本当にですか？

右手 (手話)

石田 眠くないんですか？

右手 (手話)

石田 夜勤明けなのに、

右手 (手話)

石田、今木の手に、カバンから取り出した帽子パンを握らせる。

石田 ……じゃあ、一緒に行きましょう。

今木、掴んだパンを石田に投げつける。

石田 ちよつと。

石田 あのね、今木さん、これはあなただけの問題じゃないですよ。ユキオは逃げ出しています、今木さんのことを待っている子たちがたくさんいるんですよ？先月新しくうちに来たオサムはどうなります？想像してみてください、うちで暮らしている仲間たちのことを想像して、オサムにジュンイチロウ、イサム、ノグチ……利用する方本位ではなく、生き物本位で考えようつて、言ったのは今木さんじゃないですか？忘れたんですか？ほら、みんな待っていますよ……オサム、ジュンイチロウ、イサム、ノグチ、カズオにイシグロも待っています。

途中で壁の中から今木の声が聞こえる。

今木 石田さん。

石田 ユキチはどうなるんです？所長の手からじゃないと大人しくご飯を食べてくれな
いんですよ。

今木 石田さん。

石田 え……

今木 石田さん。

石田 ……え？

今木 石田さん。

石田 そのう、え……

壁から出ていた手はうなだれている。

石田 え、…話せるんですか？

今木 話したらダメなの？

石田 ええ……そういうわけでは。

今木 あのさあ、今何時だと思ってるの？

石田 朝の2時です。

今木 朝じゃないね！2時は夜中なんだよ！

石田 でも緊急事態なんです、ユキオが脱走しちゃって、今木さんに何度連絡しても返事
がないから、

今木 そりゃそうだよ。

今木 あのね、

石田 え？

今木 壁の中に住むことにしたんだ。

石田 ……

今木 俺はさ、もう、壁の中に住むことにしたんだ。

♪街の遠くでサイレンが聞こえる。

石田、携帯電話を気にする。

メールを確認すると、ポケットに携帯電話をしまう。

石田 話せるなら最初からそうだと教えてください。

今木 話せるとわかったら、君はうるさそうだったから……

石田 ……そうですか、話せるなら話しは早いんです。さあ、一緒に施設に出て働いてくだ
さい。マコトとマモルの兄弟も、所長がご飯をくれるのを待っています。うちの冷蔵

庫には鍵がかかっていませんから、ご飯くらい自分で食べられるのかもしれませんがどね、それじゃあ、今食欲がないヨーコやジョンは、自分でご飯食べられないんですよ？ 所長がご飯をくれなかったら、為す術もなく死んじゃうんです。どうですか？ 耐えられるんですか？

石田の携帯電話に着信が入る。

石田

(電話に出る) 七岡さん！……………そうですか……………はい、引き続き、ユキオを探してくださいお願いします……………そんな！いや、分かりました。大丈夫です、少し手間取ったんですが、開所には間に合うように必ず今木さんは連れて行きますから。

壁の中から出ていた手はすると中に入っていくってしまふ。

石田

(壁に入っていく手に気がついて) あ！

手は完全に壁の中に入っていくってしまふ。

【2】公益社会法人「ひろむす」のスタッフルーム

公益社会法人「ひろむす」のスタッフルーム。

ロッカールームと給湯室を兼ねているこの部屋には、汗の匂いと昼ごはんのお弁当の匂いが一日中している。デスクトップ型のパソコンが一台設置されており、職員はその一台のパソコンを共有している。壁面にはナースコールのような、施設の各部屋からのコールを受け取ることができるシステムが設置されている。

部屋の南側には小窓がついている。

夜9時。雪が降る2月。

日勤の七岡(ななおか)は夜勤の石田(いしだ)へ業務の申し送りをしている。

そこへ善子(よしこ)がやってくる。

善子

おはようです。

七岡

はい。

善子

……………あ、もう夜か。こんばんはです。

善子、机の引き出しを開けたり閉めたり、ロッカーの中を開けたり閉めたりして何かを探している様子。

七岡は石田に業務の引き継ぎをしている。

石田

(七岡に) それでヨーコが食べたのは蒟蒻ゼリー一袋だけですか？お弁当は？

七岡

ああ、すみません。えーと、そうですね、デイリーのお弁当ももちろん、ええ、ヨ

ーコに与えたんですけど、今日のおかずは、ブロッコリーにしらすとごま油がかかって

いるのがあったので、それは食べるかと思ったんですが、顔を背けて（実際にヨーコのモノマネをしている）こう……………

石田 わかりました。下痢なし、で？

七岡 排便はないです。それで、夕方18時から寝始めて、それからそのまま寝ていますね。

石田 え。

七岡 はい……………。

石田 じゃあ晩ごはんもお風呂もまだってこと？

七岡 ですね、すみません。

石田 はあ……………、わかりました。

七岡 もう今日はお風呂なしでもいいかもです。機嫌も良くないみたいだし。

石田 でも、一昨日から入浴なしってのは……………まあ、いいや、次オサムの申し送りお願いします

七岡 はい。オサムは今日一日グッドでした。

石田 あ、グッド？

七岡 ええ、弁当も残さず、ガリックの残りかすまで舐め回すように食べて、排便が2回、入浴済み。脱衣は介助が必要でしたが、入浴後は自分で寝巻きに着替えています。

石田 めずらしい。いや、そろそろオサムも慣れてきたんですかね、

七岡 一ヶ月ここの施設で寝泊まりしてればね。最初の荒れ方はひどいもんでしたが、もうもう穏やかそのもの。今日だけでいうと、ジュンイチロウやノグチの方がバッドっ

て感じでした。

石田 ……………

七岡 続けますね。

善子 （二人へ）あ、あの、所長いないんですかあ？

七岡 え？

善子 所長。今木所長。

石田 所長になんかよう？

善子 あ、いやー、いたら聞きたいことあったんで。

七岡 今日は朝からいないけど。明日で出勤で、夕勤に入ってくれるはず。

石田 え、そうなんだ。朝から来てくれた方が助かるんだけどな。

七岡 ですよねえ。まあ、入ってくれるだけマシか。

善子 え、でも車ありましたよ。

石田 ん？

七岡 車って。あのピンクの。

善子 今木所長の車止まってたんで、いるのかなって。

石田 はあ……………、とにかく所長は休み。

善子 なんてあのピンクにしたんですかね。

七岡 わかる。ショッキングピンクの上をいくピンクだよね。
善子 逆に本人の服装地味なのウケませんか？
石田 七岡さん。

スタッフルームの電話が鳴り始める。

七岡 緑色を苔色に着こなすタイプだよね。

石田 七岡さん、申し送り。

七岡 あ、ああ。

善子 そっかー、所長いないのかー。いそうなのに。

石田、固定電話のディスプレイに出てきた番号を確認している。

石田 善子ちゃん、電話出してもらっていい？

善子 え。

石田 電話。

善子 すみません私、勤務外です。

石田 ……………。

七岡 ……………。

善子 すみません。

石田 大丈夫！そうだよね……………。

石田、電話に出る。

石田 (電話口で) はい、こちら公益社会法人「ひろむす」、「ひろむすのいえ」のスタッフ
フ石田がお受けいたします。……………はい、え？……………はあ、こちらですか？ええお聞
きます。ご入居の相談ですか？

「はい、はい……………」と用件を手元のメモに落としていく。

善子と七岡が話している間も、石田は電話先の相手の話を聞いて、相槌を打っている。

善子 七岡さん。

七岡 あ、はい。

善子 記録に「グッド」「バッド」はナシなしですから。

七岡 なしなし？

善子 石田さんは溜め込み溜め込みの人なのですよ。ね。申し送りは「必要なことを」「必
要なことだけ」「的確に」

七岡 ……………。

善子 やだ。勤務外なのに、仕事の話しちゃった。

善子、デスクの引き出しの中身を出しながら、何かを探している。

七岡　なんか……忘れ物？

善子　あ、はい。忘れ物……です。

善子、もやもやとロッカーを開けたり閉めたりしている。

七岡　ねえ、

善子　あ、あ、すみません。

七岡　所長って、

善子　え。

七岡　今木所長さん。

善子　あの、七岡さん。

七岡　はい。

善子　話しかけないで。

七岡　はい。

善子　……………。

七岡　……………。

善子　……………あー、だめだ。七岡さんが話しかけるからー。

七岡　何よ。

善子　忘れちゃったんですよ。

七岡　忘れた？

善子　もー、何を忘れてたんだっけ？

七岡　（笑って）なんじゃそりゃ。

善子　えくくくくと……………

七岡　……………。

善子　……………

七岡　……………帰らないの？

善子　帰りたいんですけどね。

七岡　急いで出てたから……………

善子　そう！今日は帰りたいんですけど、でも、

七岡　大したものじゃないですよ、忘れてるんなら

善子　七岡さん。

七岡　はい。

善子　忘れたことを忘れて、で、そのことを思い出した時に、それが忘れても良かったこ

七岡　とってありますか？

善子　ええ？

七岡　あります？喉元まで出掛かっていた忘れていたことが、何かの拍子に喉元から口

元に出てきて、それで、その出てきたものが大したことなかったことありますか？

七岡　うーん。

善子 大体ですねえ。大したことなくです。たしかに私の頭は、忘れてますけどね？私の体は、実際この事務室まで戻ってきてるんですよ。私の足が覚えてるんですよ。

七岡 え？あし？

善子 「ちよつと待って」

石田 ああ……すみません。ええ、一応ご案内ですとか、あの、見学ですとか、ええ、施設の見学は受け付けておりますけども、ええ。なんせ、ええ、もうすでに何人か利用をお待ちいただいている状況です。……はい、はい。

七岡 え？

善子 今のは足の声です。

七岡 んん？

善子 だから、足がですね「ちよつと待って」って

七岡 ……

善子 ……「ちよつと待って」

七岡 ……聞こえる。

善子 え？

七岡 何か聞こえませんか。

善子 足から？いや、嘘ですよ、ものの例え

七岡 いや、足ではなくて、

善子 ん？

七岡 ……外から。

七岡、善子は耳を澄ませている。

石田 はい……ああ、うちは日帰りで利用される方はほとんどおられなくてですね。……あ、そうですね。ホームページにはそのように記載されていますが、なにぶん古い情報です。はい、……ええ、大変申し訳ありません。基本は皆さん長期で利用されています。……はい。あ、あ、はい、……あの、見学は？ああ、そうですね、……え？なんですか？

電話の相手は電話を切ってしまった。

石田 ……切れちゃった。最近多いんだよねえ、新規でうちに入居させたいって人。つってもさ、今の人数でもパツパツなんだから、今さら新しい入居者迎えるって無理だよね。

善子 ……

七岡 ……

石田 善子ちゃんもさあ、さっきは言わなかったけど、最近勤務中は朝だろうが夜だろうが関係なく、入居の問い合わせが物すごいんだよ？やっぱ、全体の施設の母数が少な

くなつたつたつてことが大きいんだらうけど……。うちも職員結局この一年で半分になつちやつてるし、勤務外っていうのはわかるけど、新しい人が来るまでは、いやくるか全然わかんないけど、協力しあつていかないときあ、持たないよ……

善子 ……………。

七岡 ……………。

石田 ん……………？

善子 ……………外、何も聞こえませんが。

七岡 そうですね。私の気のせいだったのかも。

石田 え、なに、なんか、ある？

七岡 いや、なんか聞こえるっていうか。

石田 聞こえる？

善子 七岡さん、過労で幻聴が聞こえてたのかと思いましたよ。

ドン。と窓が外から叩かれる音。

部屋の南側の小窓がガタガタと揺れ始める。

三人 ……………。

窓から手が出ている。

三人 ……………あ!!

七岡 ひ!

石田 もしかして、入居者!?七岡さん人数確認……………ちよつと、見てきて……………窓……………

…

七岡 無理!できません。

石田 行つてきてよ!

善子 (大声で)先輩!

七岡・石田 !

善子 ……………。

石田 何、どしたの……………？

善子 ああ〜。そうだ思い出した!

善子、机の上に散乱していた書類の中から薄ピンク色の用紙を引き摺り出した

善子 (窓の手に向かつて)今木所長!所長の手を見て思い出しましたよ。

善子是小窓の外にある手に向かつて話しかけている。

善子 ハンコ。所長。この書類にハンコください。

善子、小窓に駆け寄って、開けようとするが、小窓ははめ殺しになっていて、開けられない。

善子 所長、ハンコお願いします。やっぱり、いたんですね（窓が開かないことに気がついて）ああ……………、あれ？この窓鍵ついてないんですたっけ？……………もー、スタッフルームの窓をはめ殺しにする意味ってあります？ねえ？先輩？

七岡 ……………。

石田 ……………。

窓の外の手 ……………。

窓の外は2月の夜の風が吹いている。

暗転

【3】ユキオのこと

今木所長が暮らす10㉮のアパートの一室のドア前。

石田がドアを激しくノックしている。

石田 今木さん！今木さん！…………今木さん！…………起きてください！

石田 すんません、電話出してくれないので、家まで来ましたよ。

石田 出勤、入ってくれませんかね！

石田の背後に一台のロボットが通りかかる。このロボットはユキオの分身である。ロボットと言っても、2つのささやかな車輪がついた、一五〇センチ丈の金属の柱、柱の先端には、縦一五〇ミリ×横七〇ミリ、厚さ一〇ミリ程度の大きさの液晶ディスプレイがついている。このディスプレイには音声マイクと小型のカメラが搭載されており、ユキオは遠隔操作を行いながら他人とコミュニケーションをとっている。

ユキオ 僕は時々夢を見る。

石田 （ドアを激しくノックしている）お休みのところすみません、出勤、今日の、入ってくださいませんかね！

ユキオは、石田の周りをぐるりと一周する。

ユキオが進む速度はゆっくりとしている。

移動をする時には、車輪を回すモーター音が細やかに聞こえる。

はじめはモーター音だと思って聞いているのだが、そのうちにちょうど足音を聞いている時と同じような心情になる。

ユキオ　僕は、夢を見る。歩いている。浅桶町に建てられた築三十三年のアパートに一人で暮らしている夢。僕は働いているのだ。職場と家の間を車で通勤している。大体10分くらいかかる。毎週水曜は休日、他の日はシフトになっていて、休みはまちまちなのだ。夜勤の日は夕方18時に職場に出勤して、朝5時まで働く。朝出勤の職員に申し送りをして、5時30分に職場を出る。自宅の駐車場に到着するのは大体5時45分。エンジンを停止させて、しばらく運転席でぼんやりとする。このままここで眠りについてしまいたいという気持ちを抑えて、車を出る。浅桶町の朝5時50分はとも静かだ。空がしらんでいる。僕の住んでいるのはアパートの二階。夜勤明けに階段はつらい。それでも「ままよ」と一段目に足をかける。そこで電話、僕がお尻のポケットに入れていた携帯電話が鳴る。

石田は手にしていた携帯電話を鳴らす。

部屋の中からは着信音が聞こえる。

石田、部屋に鍵がかかっていることに気がつく。

石田　入りますよ……

石田は、ゆっくりと扉を開けて、中に入っていく。

ユキオはひとり残された。

ユキオ　「やあ、ユキオだよ」と最初に電話をもらった時に男が言ったのだ。「ユキオ」というのはこの世にありふれた名前かもしれないが、僕には特別な響きだった。「ユキオ、ユキオ」と耳に聞こえた、その男の低まったかすれ声で、頭の中で繰り返し再生された。時折、ユキオは鼻水をズズズと啜った。泣いているのか、泣きそうなのか、ユキオは歯切れが悪い。いたずら電話だと、そのまま通話をきいてもいいのだが、液晶画面と右耳が何度も擦れる。

「八万円なんだ」と次にユキオがはつきりと固有名詞を話したのは八万円だった。「八万円八万円八万円八万円」、もはや八万円は僕の中で、特別を通り越した。「八万円だけなんだ」電話の向こうのユキオの声は震えていた。泣いているのだ。ああ、ユキオ、わかるよ、ああ八万円だったんだよねユキオ。

「やあ、ユキオ」僕は初めて電話の向こうのユキオに声をかけた。「嘘なんだろう、なあユキオユキオユキオ」電話の向こうのユキオは泣いている。「分かるんだ、僕は次の日のユキオだから。嘘なんてやめよう」僕の声が届いているのか分からないが続けて話した。「大丈夫。明日のお前は生きていますよ」

「ああ……」暫く黙っていた電話の向こうのユキオが口を開いた。「なあユキオ、未来は明るいのかな」掠れた声でユキオが聞く。「明るいさ。次の日のユキオも、その次も、その次も生きていたよ」ユキオにユキオとして言えるのはこれだけだった。そ

うだ、未来は明るい方がいいからね。ごめんな、でももう泣くなよユキオ……………ユキオ……………。

舞台はそのまま闇に消えていく。
しばらくはユキオが歩く機械音が聞こえているが、
やがてそれも聞こえなくなる。

【4】公益社会法人「ひろむす」のスタッフルーム

公益社会法人「ひろむす」のスタッフルーム。
夜23時。善子、石田がテーブルについている。
はめ殺しにされていた小窓のガラスは外され、そこから右手が一本出ている。
部屋の窓にはめられていた窓ガラスがなくなっているため、部屋には2月の夜風がふんだんに入り込んでくる。皆コートを着ている。

七岡がお盆に乗った四人分のコーヒーをそれぞれの目の前に置いていく。

七岡 (コーヒーを渡しながら) どうぞ。

石田 ……………。

善子 ありがとうございます。

七岡 熱いですよ。

善子 あ、はい。

七岡は、窓から出ている右手(以下、今木)にもコーヒーを手渡そうとする。
小窓はあまりに小さいので、腕一本が出るのが精一杯。外からははっきりとその人物を確認することはできない。手は身振り手振り(以下、手話)で会話に参加している。

七岡 所長、ブラックでしたっけ？

今木 (手話)

七岡 え？お砂糖入れていいんですか？めずらしい。……………それじゃあ、私ブラックでもいいので、私の分をどうぞ。熱いですよ。

今木はコーヒーを受け取る。

石田 (コーヒーを啜って) あっ。

七岡 ……………ちよっと見回り行ってくるんで話し続けててください。

石田 玄関の鍵、中から開けられそうだったら、開けて。開けられたら所長に入ってもらい、開かない感じなら、鍵屋さん呼ぶから、どのみちスタッフルームに電話入れて。わかりました。

七岡
今木 (手話)

七岡 (今木へ) ああ、いや、大丈夫ですよ。寒いですし、急ぎます。

石田 寒いから、コート着ていってね。ごめん、結局夜勤入ってもらって。

七岡 ああ、はい。今日どの部屋からのコールも全くなくて落ち着いているし、多分大丈夫です。

善子 ……落ち着いてるとか言ったら、コールなっちゃいますよ。

七岡 (笑って) そうだった。うっかり。

七岡、自分のロッカーの中からコートを取り出して羽織る。

七岡 それじゃあ。

七岡、スタッフルームから出ていく。

今木 (手話)

石田 いや、だから

今木 (手話)

石田 だから……私の意見は最初に言った通りです。信じられませんよ。

善子 ……

石田 とにかく、とくに、販売には絶対にやめたほうがいいです。

善子 ……

今木 (手話)

石田 たしかにユキオの書くものはちょっと変わっていて、人の目から見たら面白いのかもしれないけど。でも、そんな出版して販売するって……、ユキオはなんと
いうか、売って、お金をもらおうと思って、書いていないと思います。

善子 ……… 思います、でしょ。

石田 え？だって、そうでしょ。まあ、ユキオの普段の態度とかもろもろ、加味して。

善子 石田さんは夜勤ばかり入ってるから、ユキオとそこまで関わりがないから、そんなふうなんですよ。

今木 (手話)

善子 わかっています。

今木 (手話)

善子 ええ、よく話し合いました。

善子は、ピンクの紙を今木の右腕にかける

善子 だから、所長のハンコをいただきたいんです。出版の方にもちゃんと間に入ってもらって
ますし。契約内容も問題ありません。ユキオにも何度も内容を確認してもらっ
てます。

石田 ……

今木 (手話)

善子 これです。一応これまで書いてきたものを一通り私が目を通して、ちょっと古いですが、対外向けにはこれが一番世間に受け入れやすいのではないかと。

善子、鞆の中から紙ファイルに閉じられた原稿を取り出す。
石田、原稿のタイトルに目を通す。

石田 ……「運び祭の夜に」

善子 タイトルは私がつけました。

石田 ……。

善子 ……私とユキオがつけました。あとは所長のハンコさえいただければ……

石田 所長はどうなんですか？

今木 (手話)

石田 善子さんより、所長の方がユキオと関わっている時間が長いと思うんですけど。

今木 (手話)

石田 え？どういうことですか？

善子 結局石田さんは自分のお気持ちなんですよ。

石田 ……。

善子 ユキオのような利用者に対して差別があるんじゃないんですか。

石田 あんたそれ本気で言ってる？

善子 だから、ユキオの作品を出版することは、ユキオと私たちとでしっかりと話し合っ
て決めたことなんですよ。

石田 だから、差別ってわけじゃないけど。

善子 じゃあ、なんだっていうんですか？はつきり言ってくださいよ。

石田 ……もし、作品が世に出て、どーんと売れちゃったらどうするんですか？今は利
用者の作品利用ってたしかに市民権を得てきたと思いますけどね。その分もしかし
たら思っていたよりも作品が広く評価されたらどうなります？

善子 いいじゃないですか。施設の評価にもつながると思います。

石田 逆ですよ。

善子 逆？

石田 ユキオは聖人ではありませんから。

善子 ユキオ、二〇歳です。

石田 成人じゃなくて、セイントの方。聖人。

善子 ……。

石田 何か起きれば、ユキオだけじゃなく、みんなが叩かれますよ。この施設。

今木 (手話)

石田 ……。

善子 ……え？

今木 (手話)

善子 所長……？

石田 ちょっと原稿読ませて。

石田、コーヒーを一口啜り、上着のポケットの中から、レンズの分厚い眼鏡を取り出し
てかける。そして、「運び祭の夜に」の原稿を読み始めた。

今木 (手話)

善子 夢? …… 歩いて、 …… 朝5時まで働く …… 夢? なんの話ですか?

今木 (手話)

善子 …… 電話って、ユキオから電話がかかってきたってことですか?

石田 (原稿を読みながら) …… ユキオは電話かけないんじゃないかな。

今木 (手話)

善子 はあ …… え?

今木と善子は話を続けている。

石田 …… 「運び祭の夜に」もうすぐ秋。道の途中は秋の音に溢れている。旅人チヨ

ルスと三郎は通りの真ん中で言い争いをしている。 ……

石田は原稿を読み続けている。
電話に内線がかかる音がする。

善子 あ …… 七岡さんかな。

今木 (手話)

善子 え? 所長なんですか?

善子、小窓の右手に近づく。
すると、右手は善子の手を取り、しっかりと握る。

善子 …… 所長?

善子 小窓の右手と手を握り続けている。
内線電話が鳴っている。
暗転

【5】ユキオの原稿「運び祭の夜に」

もうすぐ秋。

♪♪♪ 道の途中は秋の音に溢れている。

★★★チヨルス役はユキオが小型ロボットで演じている

旅人チヨルスと三郎は通りの真ん中で言い争いをしている。

チヨルス 右

三郎 左

チヨルス 右！

三郎 左！

チヨルス みぎぎぎ！

三郎 ひ・だ・り！

チヨルス 右に決まってるだろ！

三郎 ワタクシ生まれも育ちも広島。太田川で産湯に浸かり、年はヨンじゅうハチ。性は五反田、名は三郎。故郷に妻と娘を置いてきて、手ぶらで帰るわけにはいかんです。ここは左だ。

チヨルス わからずや！

三郎 なあチヨルス、君はいくつだ。

チヨルス 20歳になったばかりだ。

三郎 ほー！若い若い！君は20歳。僕は48歳。さあ、どっちの道に行く？

チヨルス 右

三郎 左

二人 むぎぎぎぎ

チヨルス 「運び祭」はきつと右だ！

三郎 いや「運び祭」は左だ！

チヨルス わからずや！僕はこっちの道を行くぞ！

三郎 俺はあっちの道を行く！グッバイ！

チヨルス じゃあ、僕はこっちの道へ行く！「運び祭」は一人で行くからね！

三郎 俺だって「運び祭」に一人で参加してやる！

二人 むぎぎぎぎぎあな！

三郎は右の道へ、チヨルスは左の道に分かれていく。

しばらくすると左の道に進んだはずのチヨルスが、なぜか右の道から出てくる。

チヨルス (ブツブツ文句を言っている) あー！困ったもんだ！なんだってあんなに強情
っぽいんだ！……しかし、はて、これだけ歩いているのに、いつまで経っても村
にたどり着くことができないんだ……伝説の「運び祭」をこの目で見るまでは旅は
やめたくないし……

一人きりになったチヨルスは急に寂しくなる。

チヨルス はあ……………

チヨルスは青い花の前に座り込んで、落ち込んでいる。

やがてチヨルスは突つ伏して静かに泣き始める。
すると、そこへ貴子がやってくる。

汗苦勞土村の学者である貴子は、双眼鏡にシャベルなど、
調査に必要な道具をたんまり抱えている。
貴子の調査に付き合っていた山川とみかも後ろからやってくる。

貴子 (とても小さな声) その方。

チヨルス (落ち込んでいて声に気がつかない)

貴子 (先ほどよりも大きな声) もし! そのお方!

チヨルス (とても落ち込んでるので声に気がつかない)

貴子 (とても大きな声) す・み・ま・せーん!! その人!!

チヨルス うわわわわ!!

貴子 こんにちは。泣いてんの?

貴子、研究ノート取り出してメモをしている。

山川とみかは休憩している。

チヨルス な、泣いてなんかない。僕はその人ではありません! チヨルスといいます。

貴子 チヨルスさん。ふむふむ。(ノートにメモをしている) なんてこんなところにいる
の? ピクニック?

チヨルス 僕は旅をしているんだ。旅をしながら、世界中の珍しい景色やびっくりするよう
な出来事に出会って、僕の村に帰ってみんなに面白い話をしてやるんだ。二人で……

…

貴子 二人? 一人じゃないの? 私には見えていない誰かがいるのかな?

チヨルス 違うよ……、三郎っていう友達と二人で旅してたんだ。

貴子 いいわねえ。気ままな二人たび。

チヨルス だけど……さっきケンカして別々の道に行っちゃってんだ……「運び祭」
っていう不思議なお祭りをやっている「汗苦勞土村(シルクロードむら)」を探して
いたんだけど、道に迷っちゃって。

貴子 ふうん汗苦勞土村。だから泣いてたんだね。

チヨルス な、泣いてなんかないってば!

みか それなら大丈夫よ! 汗苦勞土村はもうすぐそこよ!

チヨルス えええ? だけど、僕、さっきから同じ場所をぐるぐるして……

みか 大丈夫、大ジョーブ。

山川 おんなじ場所を何度もぐるぐるしないと「汗苦勞土村」には辿り着けないから
ねー。

みか そうそう。大ジョーブ、大ジョーブ。

チヨルス 大ジョーブ……?

山川 さあ! 貴子さん、みかさん! そろそろ「汗苦勞土村」に帰りましょ!

貴子 今日の調査はここでおしまいね。

チヨルス あれ！皆さん、もしかして「汗苦勞土村」の人？

山川 チヨルスくん。困った時は、空を見て、口を大きく開けてごらん！

チヨルス なんですって？

山川 「汗苦勞土村」の言い伝え。

みか・貴子・山川

♪ はこーぶごとに つかれたら

おそーらみあげて くちぽっかり

はーああ はーああ ほーいほい

♪ はこーぶごとに つかれたら

おそーらみあげて くちぽっかり

はーああ はーああ ほーいほい

チヨルス な、なんだなんだなんだ！？

舞台上「汗苦勞土村」の住民たちが盆踊りのように現れ、回り出す。

♪ はこーぶごとに つかれたら

おそーらみあげて くちぽっかり

はーああ はーああ

♪ はこーぶごとに つかれたら

おそーらみあげて くちぽっかり

はーああ はーああ ほーいほい

♪♪♪ 雨の音が混じってくる。小雨からだんだん大雨になってくる。

チヨルス、汗苦勞土村にたどり着く。

雨が降っているので、傘をさしている。

チヨルス ここが、汗苦勞土村………本当にあつたんだ………

そこへ山川、香織、みかがやってくる。

チヨルス うわー！なんですか？

山川 まあ、まあ………

みか いいじゃないの、いいじゃないの

香織 まあ、まあ、まあ、まあ、まあ、まあ、まあ、まあ………

チヨルス 服がぬれちゃうよー！

みか 大丈夫、大丈夫。

山川 私たち、少しくらい、ぬれてもいいよ、ねえ？
香織 うん。

チヨルス あなたたちじゃなくて、僕がぬれちゃうんです！

山川 まあ、まあ、

香織 いいじゃないの。いいじゃないの。

山川 傘、珍しいんでみんなにも見てもらおうか。

香織 いいね！いいね！

みか いいね！

山川、香織、みかは傘を持って走って行く。

チヨルス あれ、ちよっと待ってー！僕の傘！

♪♪♪ 先ほどよりも強い風が吹いている。

チヨルス ああ！寒い！つめたい！………

チヨルス、着ていた上着を被る。

そこへ貴子がやってくる。

貴子 やあ！チヨルスくん。

チヨルス あ！えーと誰だっけ？

貴子 私、ジーニアス貴子。貴子だよ。

チヨルス 貴子さんおかげで村に辿り着けました、ありがとうございます！

貴子 どういたしまして！

チヨルス 傘を差さないんですか？

貴子 雨に濡れると気持ちいいからね！三郎はいないの？

チヨルス ……先！に！村！に！来！て！い！る！と！思！っ！た！ん！だ！け！ど！。

貴子 元気だしな！今晚はなんと70年に一度のお祭り「運び祭」！

チヨルス えええ！まさに今晚？

貴子 運び祭は、二千年前に始まったこの村の奇祭！ぜひ観に来てよ！

チヨルス でも、三郎が………

貴子 大ジョーブ！「カホーは運びながら待て！」汁苦勞土村のことわざよ！

チヨルス なんだそりゃ………変なの！

♪「おーエス！おーエス！」という掛け声が遠くから聞こえてくる。

貴子 さあもう夕方！祭も始まっちゃうよ！

チヨルス あれ？もう夕方？さっきまで朝だったのに！

貴子 いくよー！

疲れた村人たちは座り込む。

山川　もう無理だよ！

みか　疲れたー

香織　どへー！コーラ飲みたい！

山川　コーラ飲みたい！

響子　もう！喉が渴いたんだったら、雨でも飲んでくださいな！

疲れた村人たちはブーブー文句を言いながら空に口を開いて雨を飲み始める。

響子　もう……………村長なんとか言ってやってください！

村長　（メガホンで）

響子　みんなで万歳できるまで持ち上げて、3歩進まないで祭は成功ではありません！

村人たち　……………

響子　あれ……………？みんなどうしたの？

村人たち雨を飲んで、渋い顔をしている。

山川　なんだか、しよっぱい……………

香織　しよっぱい！

みか　ウヒヤー、辛い！

響子　そんな馬鹿な！

村長・響子、口を開けて雨を飲む

村長・響子　うわー！しよっぱい！

貴子　これはもしかして……………

チョルス　どうしたんですか？

貴子　みんな！話を聞いて！

響子　あ！貴子！祭をサボって何してるの！

貴子　みんな！聞いて！この雨は涙よ！

山川　ええ？涙！

貴子　人の涙は、蒸発して、70年かけて雨になるの！

チョルス　……………（空を見上げて）70年前に誰かが流した涙……………

貴子　そうでしょ、響子さん

響子　そう……………雨がっぱいで、いつもより大変だけど……………だけど！だからこそみ

んなで運ばなきゃ！私たちは、南の人と北の人、東の人と西の人、海のものど山のも

の、いろんな二つのものの通り道になってきたんです。誰にも拾われることのなかった悲しみを、私たちが拾わなくて、一体誰が拾うっていうんです。

貴子 みんなお願い！

村長 お願いします！

山川 泣いてる人がいるなら、しょうがねえ……みんな！やるか！

みか おう！

香織 やったるど！

貴子 チョルスくんも運ぼう！

チョルス わ、わかった。

村人たち おいっしょ！おいっしょ！しよーい！

全員 ぬぬぬぬぬぬぬ！

全員で持ち上げる

♪ はこーぶごとに つかれたら

おそーらみあげて くちぼっかり

はーああ はーああ ほーいほい

♪ はこーぶごとに つかれたら

おそーらみあげて くちぼっかり

はーああ はーああ ほーいほい

村人たち いーち！

村人たち、ゆっくりと一步を踏み出す

村人たち にーの！

村長 頑張れー！！

村人たち最後の一步を踏み出す！

村人たち さーん！！

響子 やったぞ！！

全員 うわわわわー

3歩を歩き切り、運んでいたものを下ろす。
全員疲れているが、達成感で笑顔。
拍手が溢れる。

みか みて！虹！

香織 うわーでつかい虹！

響子 みんな！本当にすごいよ！……そうだ！祭にはまだ続きがあるのよ！村長！お願いします。

村長 皆のもの！よく聞け！

山川 なんだなんだ！

香織 なになになに！

響子 汗苦勞土村に新しく住む人を紹介します！

村人たち おおー

チヨルス 新しい住民……どういうこと？

貴子 この村では、七〇年に一度、運び祭の夜に、村の外から新しい人を迎えるの。

村長と響子は、車椅子に乗せられた男を運んでくる。
男は眠っている。

チヨルス ……え、あれはもしかして……

響子 ご紹介します！村の近くで迷っていた人です！

村長 皆さん！拍手……！

チヨルス うわー！三郎！

三郎 (目を覚ます) ……おや？ここは一体。

響子 おめでとうございます！

村人、三郎に花の飾りをかけてあげる。

三郎 なんだこれ！すごい歓迎だなあ！

チヨルス おおーい！おおーい！三郎……！

三郎 おお！お前も来ていたのか！

チヨルス 何を呑気にしてるんだ！お前この村で暮らすことになるぞ！

三郎 ええ？そんなこと、この人たちがするわけ……

村人たちが、笑顔でゆっくりと三郎に近づいてくる。

三郎 ……あのう、僕にはふるさとに残した妻と可愛い二人の子供がおりますから、その、ここに住むわけには……

響子 「運び祭」第二部始まります！

村人たち わああーい！

チヨルス うわああ！逃げるぞー！

貴子 どこいくのー！？

チヨルス、三郎が乗っている車椅子を押し、二人で逃げ出す。

村人たちは大盛り上がりで追いかける。

途中、チヨルスを演じていたユキオの小型ロボットがその場で転ける。

皆小型ロボットのことは気にもとめない。

貴子・村人たち・三郎は小型ロボットではなく、人間のユキオの姿が見えている。
三郎が人間の姿のユキオの肩を叩いている。

小型ロボットはその場に倒れたまま残されている。

暗転

【6】「小窓の手」

公益社会法人「ひろむす」のスタッフルーム。

七岡がスタッフルームに入ってくる。手には小型ロボットが握られている。

七岡 もう！どうして電話に出てくれないんですか！

石田 あれ？ごめん。

善子 すみませんでした……って、それ、え？

石田 ん？ユキオさん？

七岡、小型ロボットを床に立てる。

石田 なんでユキオさん連れてきてるの？トイレ？

善子 ユキオさん、あれ？寝てる？

七岡 ……いないんです。

石田 ……。

善子 ……。

七岡 ユキオさんがいないんです。

石田 いるじゃん。ここに。

善子 それって……

石田 いやいや、だから、いるじゃん。ユキオさん、ここに。

七岡 ……。

善子 石田さん……、（小型ロボットを手にして）これ完全に落ちてる。

石田 まさか……。

石田、小型ロボットの設定をチェックし始める。

七岡 玄関開いてて、でこれ、落ちてて、すぐユキオさんの部屋に行っただんですけど、もうすでに空で……

石田 どうしてすぐに電話しないの！

七岡 だからすぐに電話したんですって！

石田 どうすんのよ……………脱走って……………

善子 所長！ユキオが、

善子、小窓の右手に駆け寄る。

小窓の右手は手を振っている。

お別れをするように、小さくやさしい幅で、手を振っている。

七岡 ……………。

石田 ……………。

善子 ……………。

しばらくの間、小窓の右手は優しく手を振っているが、
やがてどこかへ去っていく。

善子 ……………ユキオ？

少しの間、呆然としている三人。

善子は小窓の右手に握られた感触を思い出している。

暗転。

【7】「壁の中に住む」

今木家の玄関先。

黒い壁からは色白い男の手が出ている。

石田 ……キソウホンノウウという奴があつて、ちよつと賢い生き物なら、家まで帰ってくるって言うでしょう？だけど、ユキオは違う。本能ってやつはあるんだと思うけど、絶対キソウウして来ないよ。普通は、誰かに急に噛み付くなんてことはしないじゃない？例えば、いま私とあなたがこうやって話していて、私が急にあなたの手に噛み付いたりなんかしたらどう？そんなことしたらいけないでしょ？だって、それは、なんていうか、そう、常識だから、

右手 (手話)

石田 どうしよう、ユキオが今まさに外で誰かに怪我させたりなんかしたら……………

右手 (手話)

石田 ……………何か食べます？

右手 (手話)

石田 私、帽子パン持ってるんですが。

右手 (手話)

右手 (手話)

石田 おトイレとか？

右手 (手話)

石田 うそ、本当にですか？

右手 (手話)

石田 眠くないんですか？

右手 (手話)

石田 夜勤明けなのに、

右手 (手話)

石田、壁の右手に、カバンから取り出した帽子パンを握らせる。

石田 ……じゃあ、一緒に行きましょう。

今木、掴んだパンを石田に投げつける。

石田 ちょっと。

石田 あのね、今木さん、これはあなただけの問題じゃないんですよ。ユキオは逃げ出していませんが、今木さんのことを待っている子たちがたくさんいるんですよ？ 先月新しくうちに来たオサムはどうなります？ 想像してみてください、うちで暮らしている仲間たちのことを想像して、オサムにジュンイチロウ、イサム、ノグチ……利用する方本位ではなく、生き物本位で考えようって、言ったのは今木さんじゃないですか？ 忘れたんですか？ ほら、みんな待っていますよ……オサム、ジュンイチロウ、イサム、ノグチ、カズオにイングロも待っています。

途中で壁の中から今木の声が聞こえる。

今木 石田さん。

石田 ユキチはどうなるんです？ 所長の手からじゃないと大人しくご飯を食べてくれないんですよ。

今木 石田さん。

石田 え……

今木 石田さん。

石田 ……え？

今木 石田さん。

石田 そのう、え……

壁から出ていた手はうなだれている。

石田 え、…話せるんですか？

今木 話したらダメなの？

石田 ええ……そういうわけでは。

今木 あのさあ、今何時だと思ってるの？

石田 朝の2時です。

今木 朝じゃないね！2時は夜中なんだよ！

石田 でも緊急事態なんです、ユキオが脱走しちゃって、今木さんに何度連絡しても返事がないから、

今木 そりゃそうだよ。

今木 あのね、

石田 え？

今木 壁の中に住むことにしたんだ。

石田 ……………

今木 俺はさ、もう、壁の中に住むことにしたんだ。

♪街の遠くでサイレンが聞こえる。

石田、携帯電話を気にする。

メールを確認すると、ポケットに携帯電話をしまう。

石田 話せるなら最初からそうだと教えてください。

今木 話せるとわかったら、君はうるさそうだったから……

石田 ……そうですか、話せるなら話しは早いです。さあ、一緒に施設に出て働いてください。マコトとマモルの兄弟も、所長がご飯をくれるのを待っています。うちの冷蔵庫には鍵がかかっていませんから、ご飯くらい自分で食べられるのかもしれないけどね、それじゃあ、今食欲がないヨーコやジョンは、自分でご飯食べられないんですよ？ 所長がご飯をくれなかったら、為す術もなく死んじゃうんです。どうですか？ 耐えられるんですか？

石田の携帯電話に着信が入る。

石田 (電話に出る)七岡さん！ユキオ見つけましたか！そうですか………はい、引き

続き、ユキオを探してくださいお願いします………そんな！いや、分かりました。大丈夫です、少し手間取ったんですが、開所には間に合うように必ず今木さんは連れて行きますから。

壁の中から出ていた手はするすると中に入って行ってしまおう。

石田 (壁に入っていく手に気がついて) あ！

手は完全に壁の中に入っってしまおう。

壁の前で座り込み、具合が悪そうにしている石田。

石田 ……………。

今木 大丈夫。俺のことはもう、壁の中に入ることにして、七岡くん施設を継いでもらえばいいよ。石田さんも、繰り上げで、パートから、正社員にしてみれば……

石田 ……（自分自身に向かつて）今木さんが亡き今、もう、私は、どうすればいいのかわかりません。

今木 やだなあ、人を勝手に殺すなよ。

石田 勝手に死んだのと同じです！

今木 ……石田さんには悪いけど、壁の中は随分と具合がいいんだ。お腹も空かないし、眠くもない。壁の外にいる時よりも不思議と身体が縮こまっていなくて伸びやかになっているような気もする。息も随分楽にできる。石田さんは、あたかも僕が自殺しているんだと言わんばかりに非難してくるけどさ、そんなことは、全く全然ないんだよ。……ただ、さっきまで外に出ていた俺の右腕はなんだかすごく気持ちが悪い。なんだか、初めて電気風呂に入った時のような神経の気持ち悪さだよ……おえー。

石田 ……今木さん、

今木 君が来なければ、一人でゆっくり壁の中に完全に入ることができたはずなのに。

石田 ……………。

今木 玄関のノックが聞こえた途端、急に重たくなって、入れなくなっちゃったんだよ。

石田 ……所長がいないと、困るんです。

今木 そんなことはないよ、七岡くんも石田さんも、よく頑張ってるじゃないか。

石田 ……………。

今木 みんなで頑張ってるからこそ、結果が出ていると思うんだよ。給料も、そんなにたくさんもらっているわけではないし、夜勤を始めて、なんというか、僕たちはみんな疲れている。だけど、だからこそ、みんな生き生きしているんじゃないかな。

石田、携帯電話を気にしている。

石田 今木さんはユキオに噛まれたことありますよね？

今木 石田さん、

石田 私もありますよ、ユキオに噛まれたことがなんども、毎回髪を抜かれるし、この間はユキオに右ストレートを決められて、視力が少し落ちています。肋骨だって、いつも2、3本折れているんですよ。

石田は着ていた長袖シャツの袖を少しめくると、包帯がめくられて見える。
そして、目には眼帯をしている。

石田 さっきの七岡さんからの電話で、ユキオが見つかったそうです。今七岡さんが車に

ユキオを乗せて、戻ってきてるって。
今木 そうか、

石田、カバンの中から、一枚の書類とボールペンを取り出す。

石田 今木さんをお願いします。

今木 ……

石田 ユキオを退所させて欲しいんです。

今木 ……七岡くんにももらえばいい。

石田 代表のサインがどうしても必要なんです。

今木 七岡くんか、石田くんが俺の字を真似して書けばいい。

石田 ……できません。

今木 どうして？簡単なことだよ、名前を書くくらい。

石田 できないです……

今木 俺は君がいうサインというのを今まで何枚も何十枚も書いてきたよ。石田さんが書けばいい。僕のサインの字はよく見慣れているだろう？ハンコはいつもの、俺の机の一番上の引き出しにある、菓子入れの中だ、わかるよな？

石田 ……

今木 七岡くんや他の社員の奴らは、こういう責任のとりたくないことはしようとしな
いさ。でも、石田さんならできるよ。俺はもうダメさ、壁の中が居心地が良すぎてね
……さっきは全く眠くはないといたんだけど、さっきからずうっと眠たいんだ。

石田 今木さん、寝ないでください。

今木 ……

石田 寝ないでくださいね。

今木 なに、後のことはなんだかんだ七岡くんが全部片付けてくれるよ。彼のデスクの上
に置き手紙をしておいたから。

石田 今木さん。

今木 ……そうだ、ついでにお願いがあるんだけど、

石田 なんですか？

今木 玄関の靴箱の中に、三越の袋が入れてあるんだけどね、

石田 はい。

今木 その中にユキオの服が入ってるから、それもって行ってやってくれないか？

石田 え？

今木 一番最初に、ユキオをうちで引き取るときに、この家でユキオと会ったんだ。ユキ
オを保護してた人が持ってたんだけど、そのままうちにおいて帰ったんだよ。忘れて
たんだけど、俺はもう、いけないから、頼むよ。

石田 ……わかりました。

石田、玄関に行き、三越の袋を見つけて持ってくる。

中身を広げると、それは成人男性用のフルジップパーカーだった。

今木

俺はさ、本当に好きだったんだよ、オサム、ジュンイチロウ、イサム、ノグチ、カズオにイシグロ、ユキチ、マコト、マモル、ジョンにヨーク、そして、ユキオのこともね、本当のことを言えば、昨日の夜、ユキオの部屋の鍵を開けておいて、外に出したのは俺だ。俺なんだよ。だって、いつまでも、壁の中に住んでるんじゃないか？ そうだろ？ 石田さん、あれ？ おーい、石田さん？

石田からの返事はない。

石田の携帯電話の着信音が聞こえる。

今木「石田さん、石田さん」と石田の名前を呼び続ける。

石田、電話に出て、七岡と話し始める。

石田には今木の声はもうすでに聞こえていないようだった。

部屋の中には、一人の女性と、成人男性用のパーカー、そして壁があるだけだった。

電話を切ると、石田は成人男性用のパーカーを開いて当ててみる。

内側にボアがついていて暖かそうなパーカー。茶色いボアは着倒されているためか、その厚みを失っている。

石田はパーカーを羽織り、ジップを上まであげる。

冬の匂いがする。

そのまま石田は部屋を出ていく。

おわり。